

宣教と神学：福音主義的衝動とその運動を神学的に彫琢する

2006年度

11月27日

目次:

神学研究会の二つの目標	1
歴史的ルーツと連続性	2
宣教と改革—福音主義的衝動	2
福音の聖霊による説き明かし	2
神学会の課題—状況的関連	3
初期の形体を新形体へ	3
今日的状况にあう使信の解釈	3
発題Ⅰ：アナバプティズム	4
発題Ⅱ：長老主義的靈性	4
発題Ⅲ：ルター神学	5
発題Ⅳ：松江バンド	5
研究会議プログラム	6

“過去”と“現在” — 神学研究会議の目標

コーディネーター長:安黒務

「春期研究会議」が祝福のうちに終了した直後、関西聖書学院の会議室で「秋期研究会議」の相談会がもたれました。その後、しばらくの紆余曲折を経て、「宣教と神学」という大枠のもと「福音主義的衝動とその運動を神学的に彫琢する」というテーマに絞ることとなりました。

このテーマで目指しているものは、二つあると思います。第一の目標は“過去”に属する事柄です。西部部会に属する特色のある幾つかの神学校とその背景にある諸教会の歴史的遺産とその中に存在してきた“福音主義的衝動”を神学的に彫琢していただくとともに、教会史のある時点における使徒的福音と使徒的実存の特色ある運動として“時間軸・空間軸における展開のしくみ”を明らかにしていただくことです。第二の目標は“現在”に属する事柄です。単なる「過去の運動」についての学びで終わるのではなく、「神学研究会議」としての役割を果たすことです。

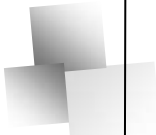


秋期研究会議の会場：福音聖書神学校

つまり伝統的関連以上に重要なのは、神学の状況的関連です。<かつてそうだった>と語るだけでなく、<現在こうである>と、歴史的に存在した“福音主義的衝動”を今日的に“彫琢”していただかねばならないのです。

これらの目標を理解していただくために、以下に二つの引用文を紹介させていただきます。研究会議の狙いと焦点を理解していただければ幸いです。

**現在の根は
過去に
深く根ざしている。
教会の歴史は
現在を解明する。**



神学研究会議の第一の目標：「過去」

宣教と神学：福音主義的衝動とその運動を神学的に彫琢する

歴史的ルーツと連続性への呼びかけ

テーマが目指している第一の目標「過去」に関連して、1977年に、教派的背景を異にする福音派の指導者たちと、大学、神学校関係者たちによる研究会議が開かれ、その際四十名の署名をもって公表されたアピールである『シカゴ・コール』の中の最初の主題〈歴史的ルーツと連続性への呼びかけ〉を紹介させていただきます。

「われわれは、聖書と聖霊さえあれば過去とは無関係であると性急に思い込むことによって、われわれのキリスト教的遺産の豊かさをしばしば見失ってきたことを告白する。その結果、われわれは神学的に皮相なものとなり、霊的には虚弱となり、他の者たちの間でなされている神のみわざには盲目となり、われわれをとりまく文化と安易に結託してしまった。」



神学校

福音宣教と教会改革における福音主義的衝動

「これがために、われわれのキリスト教的遺産の回復を要請する。教会の歴史において、キリストの絶大な救いの恵みを宣べ伝え、聖書に従って教会を改革しようとする福音主義的衝動 (evangelical impulse) が絶えず存在した。この衝動は、公教会的な諸会議が明らかにした教理、古代教父たちの敬虔、アウグスティヌスの恩恵の神学、修道院改革者たちの熱心、実践的神秘主義者たちの献身、クリスチャン人文主義者たちの学問的な誠実さの中に表れた。

さらに、プロテスタント宗教改革者たちの聖書への忠誠と宗教改革急進派の倫理的熱心の中で花を咲かせ、宗教改革を完成させようとしたピューリタンと敬虔主義者たちの努力に引き継がれた。それはまた、十八、九世紀の信仰覚醒運動の中に表された。これらの覚醒運動はルター派、改革派、ウェスレー派およびその他の福音的諸派を、教会の刷新と、福音の告知と社会实践による宣教の拡大、という全教会的なわざにおいて一致団結せしめた。



駐車場から

福音が聖霊の働きにより説き明かされるときはいつでも

この衝動は、キリスト教史のどの時点においても、福音が聖霊の働きによって説き明かされるときにはいつでも存在していた。たとえば、ギリシャ正教会とローマ・カトリシズム内部の刷新運動の一部の中にも、またわれわれと異なる形態をとるプロテスタント諸派内部における聖書的洞察のあるも

のの中にも存在している。われわれは聖書が示している福音の枠を越えようとは思っていない。しかし、われわれは、福音の全体的意味に関して、他の時代や、他のもろもろの運動から学び取る必要を認識しないでは、十全な意味で福音主義的であるということはいくつかできない。」

一口に現代の福音派と言っても、その中には種々色合いの違った多くの流れが存在している。

実はそれら一つ一つの流れの背後には、みな特定の歴史的運動が介在している。

神学研究会議に課せられた課題－状況的関連

テーマが目指している第二の目標「現在」に関して、理解していただくために、H. G. ペールマン著『現代教義学総説』の教義学の任務についての記述を紹介させていただきます。

「伝統的関連以上に重要なのは、教義的神学の状況的関連である。それは一積義や教会史のように一聖書的・教会的ケリュグマをただおうむ返しに語るのみでなく、むしろまさに新しく語らねばならない。

伝統をただ単に要約するにとどまらず、新しく理解する、教義学のこのような生産的課題は、今日の教義学において一般にあまりにも過小評価され、教義学教科書が主として歴史的な方向付けにとどまることが多く、あるいはほとんど全く歴史的論述にとどまっているゆえに、それだけに重要である。組織神学は、聖書の発言をただ単にモザイクの石のように、まとめて並べるだけでなく、移し並べる〔翻訳する〕。



図書室



コーヒー・ブレイク

今日的状況にあう「キリスト教使信」の解釈を

『伝承された信仰の証しを現在に責任を負うべきものとして思考することが、…組織神学の内容』である。『それは、<かつてそうだった>と語るのではなく、むしろ<現在こうである>と語るのである。』…組織神学は『出会った現実と直面して言語創造的出来事のために、自らを開示しなければならない。』

組織神学は、『決して歴史的部門ではない、…むしろ、それは私たちの今日的状況にあうところのキリスト教使信の解釈を、私たちに与えんと試みるものである』。組織神学とは『現実の問いに対し解答する神学』である。」

<初期の形体>を<新しい形態>へ

つまり解釈学的課題〔…解釈学とは、『伝承されたテキストに火を投げ込む<技術>…』である〕を遂行しなければならない…。教会史や伝道において福音の時間的、空間的進歩から、教義的神学の『キリスト教的真理』は、『より初期の形体から新しい形態

へと翻訳されることを要求する』。

『組織神学は…キリスト教の真理を私たちの今日にふさわしい妥当性に、基礎づけて表現しなければならない』。…教義学は、私たちの時代の言葉に、<聖書を翻訳する>機能を果たさねばならない。

歴史的権威だけがあって規範的権威をもたないものがある。

我々は、本質的な内容を保持しつつ、今日的な形で述べることを目標としなければならない。

発題Ⅰ：アナバプティズムにおける福音主義的衝動の輪郭・全体像を彫琢する

福音聖書神学校 武田信嗣

今回、「西部部会に属する特色ある幾つかの神学校とその背景にある諸教会の歴史的遺産とその中に存在してきた福音主義的衝動を神学的に彫琢する」ということで、福音聖書神学校が属するメノナイトブレザレンの源流である、16世紀再洗礼派に特に焦点をあて、上記のタイトルで発題させて頂く。

再洗礼とは、以前の洗礼（特に幼児洗礼）を認めず、信仰による洗礼を新たに授け直す行為である。であるがゆえに、16世紀の再洗礼派の人たちのこの行為は、それまでの「キリスト教世界」の理念を根



福音聖書神学校

十六世紀のプロテスタント宗教改革は、その発展過程の中で四つの主要な流れ—ルター派、カルヴァン派、アナバプテスト派、英国のプロテスタントを生み出した。

英国のピューリタンのうち、会衆派ピューリタンからバプテスト教会が生まれた。

底から破壊する行為とみなされ、根絶の対象とされた。そのような中で、彼らは当時の「キリスト教世界」の外に「信じる者の共同体」を形成せざるを得なかった。さて「キリスト教世界」と非連続に生きる道を選び取った彼らの分離主義的行為は、福音主義的衝動として許容し得るか、許容し得るならば、それは如何なるものであったか。またそれは現代キリスト教に光を与え得るか。



神学校チャペル

発題Ⅱ：スコットランド・カベナンターの長老主義的霊性

改革長老教会・神戸神学館
滝浦 滋

序

カルバン・ノックス・スコットランド諸契約の歴史の概略
特に、1638年の国民契約のときの「冠と契約」の旗の精神（レスリー将軍のブルーバナーによる対チャールズ一世勝利）

1) 聖書における「キリストの契約と王権」の構造

a. 聖書正典編集の核となった「

キリストの契約と王権」

b. キリスト礼拝と生活のため聖書に備えられたリタジー

c. 宗教改革で表されたキリストの福音とその二つの展開

2) 「契約と王権」による救い：キリストのみが救われる

a. ケルト時代以来、英国諸島の果たした福音と宣教への役割

b. 共通の福音的情熱：聖書・キリスト信仰・神中心＝恵みのみ

c. 教会を王の干渉に抗し言葉

の権威と福音の上に立てる長老主義と殉教

3) 「契約と王権」への応答：キリストのみが支配される

a. キリストの教会王権とPuritan Regulative Principleの教会

b. キリストを王とし家庭・国家をあげて福音に応答するスコットランド

c. その幻に生き続けるため、福音に立つ十戒による応答の証しの戦い

発題Ⅲ：ルター神学における宣教的次元

神戸ルーテル神学校 橋本昭夫

ルター神学のアルファにしてオメガは「義認」である。教会が立ちもし倒れもするといわれるほどに中心的である。そして今日の宣教において、なお一層、このメッセージの現実性と必要性：

actuality and relevance
が認識されるのである。

人はどの時代にあっても自己の存在がどのように是認されるのかを問い続けている。力を得よう、才に優れた者になろう、美しくあろう、などさまざまな努力を重ねて

いる。その究極は変わらず自己の存在がどのように価値づけられ、是認されるのかという問いである。それは、ルターが「わたしはいかにして恵み深い神を見出すことができるのか」と問うた問いと深くつながっている。

私たちのこの国が、いままでになく熾烈な競争社会になりつつあることは多く言われているところである。勝ち組・負け組という対概念はその事情を端的に表現している。勝つて是とされ、負ければ非とされ、「人でなし」とされる社会である。神学的に言うならば、「律法主義」の世界である。

そのような現実の中でこそ、人が義とされるのは、つまり人の存在が是とされるのは、自らよりの「行い」によってではなく、「外から」のゆるしの恵みであり、それ以外に人の存在の是認はないとするメッセージこそ、実存状況のいずれであれ、人を生かし、喜びと愛と希望を与えるものである。ルター神学の核心が今日においてなお一層宣教的次元をもつゆえんである。



発題Ⅳ：松江バンドの歴史と信仰—日本におけるバックストンの教会史的意義—

関西聖書神学校 工藤弘雄

日本初期プロテスタンティズムの三バンド—横浜・熊本・札幌と松江バンドの連続性と非連続性。人格的聖化と宣教の動力としての聖化運動。

1, バックストンとその時代

- 1) 時代的背景・19世紀における英国福音主義運動
- 2) 根元と土壌・バックストン家の信仰の系譜、ケンブリッジ教授ら、学友、霊的指導者
- 3) 信仰体験—新生・聖化・宣教への召命

2, 日本宣教—松江バンドの形成—

- 1) バックストン来日とその時代・新神学の台頭、旧帝国憲法発布、教育勅語発令
- 2) 松江とその周辺における宣教、

弟子たちの育成

- 3) 松江からの拡大・中田、笹尾、河辺らの全国的「ホーリネス純福音運動」

3, 日本宣教—日本伝道隊の形成—

- 1) 日本伝道隊の設立とその働き・救霊伝道、聖書学舎、諸教派への教師派遣、文書伝道
- 2) 日本伝道隊の働きの拡大・ソーントン、バーネットの働き、活水の群、復興教会他
- 3) 日本イエス・キリスト教団の設立・戦前から戦後へ

4, 松江バンドにおける聖化信仰

- 1) 義認と聖化
- 2) 聖化の転機と持続、成熟性
- 3) 聖化の消極面と積極面・十字架と聖霊
- 4) 主の臨在信仰・人格、生活、宣教のすべてにおいて

この「信仰」に対する「報酬」。聖化は宣教の目的とともにその手段。

1784年には、メソジスト派が英国教会から独立した。

このメソジスト派が母体となって、後に米国においてホーリネス、ナザレン、アライアンス、フリー・メソジストなどの教会が生み出されていった。

日本福音主義神学会 西部部会
秋の研究会議のご案内

Mission and Theology :

Elaborating the Evangelical Impulse & its Movement Theologically

1. 日時 : 2006年 11月27日 (月) 10:30am - 4:00pm

2. 場所 : 福音聖書神学校 (EVANGELICAL BIBLE SEMINARY)

〒563-0038 池田市荘園二丁目一番十二号 【TEL.072-761-1397】

*会場準備の都合上、参加希望者は必ず【Fax.072-762-5731】にて、お申込ください。

3. 主題: 『福音主義的衝動“the Evangelical Impulse”とその運動を神学的に彫琢する』

「シカゴ・コール」の第一項に「歴史的ルーツと連続性への呼びかけ」があり、「教会の歴史において、キリストの絶大な救いの恵みを宣べ伝え、聖書に従って教会を改革しようとする福音主義的な衝動が絶えず存在してきた」とキリスト教的遺産の回復が要請されています。

今回の会議では、西部部会に属する特色ある幾つかの神学校とその背景にある諸教会の歴史的遺産とその中に存在してきた「福音主義的衝動」を神学的に彫琢していただくとともに、教会史のある時点における使徒的福音と使徒的実存の特色ある運動として、「時間軸・空間軸における展開のしくみ」を考察し、「他の時代や他のもろもろの運動」との対話と議論を経て、そこに隠されている「福音の全体的な意味」を掘り下げさせていただきたいと思えます。

4. プログラム (敬称略) 10:00 受付開始

10:30- 10:45 開会礼拝: 賛美・祈り・歓迎の言葉・会議の趣旨説明 (眞鍋孝)

【 発題 】(司会: 福田充男)

10:45- 11:20 I. 『アナバプティズムにおける福音主義的衝動の輪郭・全体像を彫琢する』

(福音聖書神学校: 武田信嗣)

11:25-12:00 II. 『スコットランド・カベナンターの長老主義的霊性 (神戸神学館: 瀧浦滋)

12:05-12:40 III. 『ルター神学における宣教的次元』 (神戸ルーテル神学校: 橋本昭夫)

12:40- 1:40 昼食: 各自外食をお願いします: (理事会: 昼食時)

1:40- 2:15 IV. 『松江バンドの歴史と信仰ー日本におけるバックストンの教会史的意義ー』

(関西聖書神学校: 工藤弘雄)

2:15- 3:30 【 パネル・ディスカッション 】 (パネラー: 発題者、司会: 安黒務)

3:30- 4:00 閉会礼拝: 全体の総括・賛美・献金・祈り: (牧田吉和)

(コーディネーター: 眞鍋、福田、正木、安黒)